

博物館と地域活性化

「昭和三〇年代ブームとのかかわりから」

松崎 憲三

はじめに

一、高齢社会と博物館活動

二、昭和三〇年代ブームをめぐって

三、「昭和の町づくり」と地域活性化
結びにかえて

はじめに

朝日新聞では、一九八九年一月五日から五回にわたって「老いるむら」なる特集を組んだが、そのタイトルは以下の通りであった。

- (1) 年寄りだけになった／消える共同体の営み、病氣・火事…不安だらけ／（京都府大江町北原）
- (2) 葬法も祭りも変えた／担い手流出に勝てず、伝統行事・観光化で今日化／（高知県物部村、福島県会津高田町）
- (3) ゲートボールの今／ブームの陰に罪も、地域に根ざす活動が必要／（鹿児島県始良町）
- (4) 介護役も年寄り／寝たきりの家で、病院嫌い負担は家族で／（岩手県紫波町）
- (5) 柱に抱きつく老人／「こころ」の願い込め、家族と同居派の疎外感／（新潟県新発田市、福島県会津坂下町）

これらのタイトルを見るだけでも、過疎地が抱えている問題の多様さとその深刻さを推し量ることができる。しかも過疎化イコール高齢化と言ってよく、若年層の流出によって祭りや行事の維持にとどまらず、日常生活の維持さえ危ぶまれている。多少の程度の差こそあれ、農山漁村のみならず地方小都市でも同様の悩みを抱えているといえる。

こうした状況の下、過疎地では主として自治体を中心に、地域社会の再編と活性化に向けて積極的な活動を展開している。さまざまな活動を筆者なりに整理すると以下の通りである。なお、(一)内は同一活動の対外向けの事業を示している。

- (a) 地域の認識を深める（地域のイメージづくり）
- (b) 人材育成（新規定住者の確保、ボランティア活動の受入）
- (c) 自然環境の保全（自然観察、レクリエーション）
- (d) 産業振興・農林漁業の保全（地域産品・産直活動、体験学習・オーナー農園及び観光・レジャー開発）

(e) 伝統文化の継承と活用（祭りとイベントの開催他）

(f) 地域間交流（都市や周辺市町村との交流、山村留学他）

このうち小稿では、(e)とかかわる博物館の活動に焦点を当てたいと思う。

一九九一年一月に『博物館づくりと地域おこし』なる書物が刊行されているが、編者である岩井宏實は次のように述べている。⁽²⁾

「博物館」というものが、果たして地域活性化・地域おこしに役立つのであろうか。従来の博物館、博物館に対する既成観念からすると、否定的に考えざるを得ないであろう。しかし、

表1 ミュージアムと地域の関係

	第1期	第2期	第3期
時代	珍品保存のための施設	大衆のための社会教育の拠点	地域を変革する触媒装置
コンセプト	<ul style="list-style-type: none"> ・主役はコレクション ・富裕、インテリ層が主に利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・主役は利用者 ・家族連れ、団体など、あらゆる人たちが利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・つくる過程から地域の市民が参画 ・ボランティアに加え、市民がミュージアムの運営にも参加
重視される機能	<ul style="list-style-type: none"> ・保存と研究が中心 ・閉鎖的、近寄りがたいイメージ 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育普及 ・マーケティング ・広報、宣伝 ・「友の会」の組織化 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域力の発掘と人々の潜在力の開拓 ・アウトリーチ活動 ・参加型ワークショップなど

今日においては博物館そのものが大きく転換しつつあり、博物館に対する観念も一変しつつある。博物館は住民の憩いの場であり、知的交流の場であり、情報交換の場と考えられるようになり、地域活性化の重要な機関であるとされるようになった。

岩井によれば、博物館が地域活性化の一翼を担いうるという発想は、一九八〇年あたりから芽え始めたという。同様に上山信一・稲葉郁子らは、博物館と地域との関係を第三期に分けており(表1参照)、現代のそれを「地域を変革する触媒装置」と位置づけている。⁽³⁾ ちなみに、上山らは第二期を戦後の高度経済成長期以降の大衆化の時代と見ており、特に第三期については年代を特定していないが、岩井が指摘するように、「高度経済成長の終焉に伴う地域経済・文化の地盤沈下の兆しと、それに対応するかの

ように台頭してきた高度情報化社会の到来と、軌を一にしている」と見てよいだろう。⁽⁴⁾そしてこの時期以降、地域住民を取り込んだ地方公共団体による地域密着型博物館の活動や、遠野市の「民俗博物館公園構想」に象徴されるようなエコ・ミュージアムの発想に基づく活動も見られるようになった。

ところで高度経済成長による変貌が著しかったため、それ以前の生活へのノスタルジアが喚起されるのか、近年「昭和三〇年代」が一種のブームになっている。その一つの表れか、「昭和」をテーマとした博物館も目立っており、昭和の町並を復原して地域を活性化しようとする動きも見られる。また高齢社会への対応として、昭和期の生活道具の活用を通して回想法に役立てようとする博物館の試みもなされるようになった。小稿では、先ず高齢者を積極に取り込んで活動している、福島県只見町と岩手県川井村の取り組みを取り上げる。次いで「昭和」をテーマとして活動している愛知県師勝町歴史民俗資料館、大分県豊後高田市の取り組みに言及し、比較を試みることにしたい。

一、高齢社会と博物館活動

全人口に占める六五才以上の割合（高齢化率）が七パーセント以上の社会を高齢化社会、ま

たその倍の水準、つまり一四パーセントを超えた社会を高齡化が安定した社会という意味で、高齡社会と呼んでいる。日本においては平成七年（一九九五）に高齡化率が一五パーセントを超え高齡社会となり、平成一六年九月一五日現在の高齡化率は一九・五パーセントに達している。⁽⁵⁾ そうした中で、高齡者の自立、虐待、医療・介護等々の社会的問題がクローズアップされるに至った。従来民俗学は、経験豊富な高齡者達をインフォーマントとすることにより多くの研究成果を蓄積してきた。けれども老人達が抱える問題と向き合うこともなく、ただ調査の対象者として利用し続けてきたにすぎなかった。そうしたことへの反省から、近年老人を研究対象とする論考も少ないながら見受けられるようになった。⁽⁶⁾ 一方博物館では、単なるインフォーマントと位置づけるだけでなく、パートナーとして老人のパワーを得て博物館活動の活性化、地域の活性化に役立てようとする動きも顕著になってきた。

福島県只見町のそれは、必ずしも博物館活動という訳ではないが、老人層を中心とする町民有志が主体となつて、所謂民具の保存・整理を手がける一方、行政もバックアップするという形で住民中心の民具の保存・活用運動を展開した。この活動は「只見方式」と呼ばれ全国から注目されたが、その一部二、三〇三点が「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」として国の重要有形文化財に指定され、長きにわたる活動が実を結んだ。

昭和四〇年代の高度経済成長期あたりから、各集落毎に民具の収集活動が進められていたよ

うだが、本格的な保存運動は『町史民俗編』編纂事業をきっかけに一九九〇年頃から始まった。これがいわば第一期であり、第二期は、文化財指定を目指して教育委員会に文化財係を設け、文化庁の補助を受けて一九九八年から始まった。一期、二期とも町民が整理に積極的に参加し、この運動の主体になっているという点では一貫している。第一期では、収集した民具の記録カードに名称、材質、寸法、使用目的、使用年代を記述し、実測図を描き写真も貼付した。第二期は民具の修理やビデオ撮影に加え、徹底した記録保存を行ない分類を試みた。⁽²⁾これらの運動の主たる担い手は、「明和民俗を語る会」や朝日地区の民具愛好者達であり、いずれも只見町に住みながら自分の手で民具を製作し、使用してきた経験者達である。しかも彼等は、民具実測図の作成に際しては奥会津地方歴史民俗資料館の指導を受けたり、講習会に参加して技術を習得した人々であり、記述カードの資料的価値は高い。

この運動を陰になり日向になって支えてきた福島県立博物館の佐々木長生は、

只見地方の人には、豊かな自然を利用する（生産）ことにより、獲物（生産物）を得て、それらを消費（衣食住）してきた。その生産および消費に必要な道具として民具がある。すなわち民具は、只見地方の自然と人々との生活を物語る歴史の結実でもある。その一つひとつには、只見地方の自然の香りと、人のぬくもりが込められている。今回、そうした民具

を實際に製作し使用してこられた町民の人たちにより整理され、後世の人たちに伝えられようとしていることは誠に大きな意味がある。これら一連の活動は、民具保存運動へと発達して来ているが、この精神は将来、引き続き後世に受け継がれていくことができると思う

と述べている。⁽⁸⁾ こうした活動は、(e) 伝統文化の継承と活用を通じて、(a) 地域認識を深め、将来の地域社会を担う(b) 人材育成をめざすという、地域活性化の効果としては漢方薬の趣を持つが、それだからこそ息の長い活動が必要といえる。なお佐々木は、「現在、整理された民具は、旧朝日公民館に整理棚を作つて収蔵されている。将来は、総合的な学習や生涯学習の教材として活用していくためにも、展示機能や体験機能を備えた施設整備が必要になってくる」と強調している。⁽⁹⁾ 苦勞して収集し整理した資料を死蔵化せず知恵を宿した記憶装置として甦らせるためにも、展示施設、総合学習等に活用する場が必要であり、すみやかな対応が求められよう。

一方、北上山地のほぼ中央、早池峰山の北麓に展開する川井村も、只見町同様過疎化が進行している村であるが、やはり早くから民俗資料調査を手がけ、民具の収集・整理事業を推進して来た地域である。しかもこれらの資料も、平成一五年に「北上山地川井村の山村生活用具コレクション」として、国の有形重要民俗文化財に指定されている。

川井村でも、昭和三〇年代には『川井村郷土誌』編纂とかかわる形で、民俗資料の所在調査

が行なわれていた。その後、昭和三八年（一九六三）に実施された文化庁の「民俗資料緊急調査」をきっかけに本格的な調査が行なわれるようになった。地域住民を主体とする村の文化財調査委員（六学区毎に一、二名が委員となる）が中心となり、生産・生活用具や歴史関係資料の悉皆調査が実施された。各委員の下に何人か協力者が手伝ったが、彼らの情熱と誠意に感銘を受けて各地区の人々は全面的に協力してくれたという。調査は小国地区に引き続き江繁地区、門馬地区、川内地区、箱石地区の順で行なわれ、平成三年（一九九一）に川井地区が終了し、調査は一段落した。これらの調査結果は、各地区の民俗資料報告書として刊行されている。

平成三年に民俗資料所在確認調査ともいえる調査が一段落したことを受けて、村の歴史の蓄積である貴重な民俗資料を収蔵・展示するための民俗資料館建設の気運が高まった。平成四年から建設の準備が進められ、民俗資料の収集は以前の所在調査に基づいて二年という短期間で進められ、平成六年（一九九四）一一月に開館の運びとなった。開館当時までに収集された資料の総点数は七、〇〇〇点、うち民具は五、〇〇〇点であり、開館に際して多くの地元民が開伊川で民具の洗浄に協力してくれた、というエピソードも伝えられている。資料のデータ化は岩手大学講師の名久井芳枝氏と岩大の博物館学実習の学生が行なったが、実際に製作しまた使した人、またその資料を見た経験を持つ人が多く、彼等から直接聞き取り調査を実施した。さらには精密な実測図も作成されており、資料的価値は申し分ない。

川井村の場合、民俗資料を収集し、展示するのみにとどまらず、積極的な博物館活動を展開している。小中学校の総合学習や地域の子供会と連携し、博物館や民俗資料を積極的に活用しているのである。実測図の講習会なども特色ある活動の一つといえる。名久井氏が中学の総合学習の一環として実施しており、その目的は、実測図の作成を通して民具を観察し、それぞれの民具の持つ重みを知り、ひいてはかつての生活のありようを理解してもらうことにあるという。一般向けにも実測図講習会を開いており、こちらに関しては資料整理のボランティア育成といったねらいもあるようである。また、「暮らしを支えた技術」と称して背中当て、ハバキ、シヨイゴッコ等を作製する体験学習も実施している。これらの活動を推進するためには、学芸員の力だけに頼るのではなくやはりバックアップ体制が必要であり、川井村では高齢者人材バンク『青松』なるものを組織し対応している。そのねらいは、「高齢者の生きがいを高めるため、高齢者がこれまでの人生に培った優れた知識・経験を広く村民特に若い世代に伝えていき、その過程でお互いの心のふれあいを図るとともに、指導者としての高齢者の役割についても、実践活動を通じて自分も学び、それを地域社会に生かす」ことにある。つまり老人が持つ潜在的パワーをフルに活用し、彼らが培って来た知識・技術等の伝承に努めるとともに、地域の活性化に少なからず役立てようとするものにはかならない。平成一六年度の『高齢人材バンク青松・指導者名簿』には、部門別に「郷土芸能」一九名、「郷土料理」二二名、「伝統工芸」二四

名、「伝承遊び」八名、「農作業指導」六名、「舞踊」二名、「郷土史、昔話」四名、「手工芸」一〇名の名が連ねられている。この人達は一定期間の訓練を経て、子供達その他に教えられるノウ・ハウを習得しており、要請があればいつでも対応できる状態にある。彼らの存在があつてこそ、博物館や民俗資料が有効に活用されているのである。⁽¹⁰⁾

ちなみに川井村では、この「川井村北上山地民俗資料館」や「薬師漆塗工芸館」等を核に、エコ・ミュージアムとしての「木の博物館」を設置する、という構想もある。その実現にこぎつけるまでには相当の時間を要しようが、心待ちにしているのは筆者のみにとどまらないだろう。

二、昭和三〇年代ブームをめぐって

只見町、川井村の民具の収集・整理と活用は、高度経済成長を境に生活が大幅に変貌する（そのため生活革命とさえ呼ばれている）、それ以前の伝承文化をもう一度見据え直すという運動でもある。その意味でここで取り上げる「昭和三〇年代ブーム」と（都市部と農山漁村部と）いった違いはあれ）どこか通ずるところがある。

平成一六年（二〇〇四）六月二一日付朝日新聞夕刊「昭和三〇年代の力」なる記事は、平成

一四年（二〇〇二）七月オープンのサンシャインシティ二階・池袋餃子スタジアム、同年一月オープンの台場一丁目商店街に言及した後、この種の施設の魁的存在、一〇年前にオープンした新横浜ラーメン館を紹介している。それによれば、夕焼けに染まる空、遠くから聞こえるチャルメラの音、日活アクション映画の看板等、日清食品の世界初の即席ラーメン「チキンラーメン」が売り出された昭和三三年（一九五八）の街が再現されているという。五〇歳代の来館者の「貧しかったけど、みんなでがんばっていた。なにより正直だった」という感想を引き合いに出しつつ、「決して衛生的だといえなかった時代だから、すべてを再現しているわけではない。ただイメージを再現することで、リアルな『期待通りの過去』が演出されている」と結んでいる。なお、年間の来場者は一五〇万〜二七〇万人にのぼるといふ。

千葉県の松戸市立博物館は、公団住宅常磐平団地の2DKを再現し、昭和三七年（一九六二）当時の生活を逸早く展示した施設として、我々民俗学徒の間ではよく知られている。近年では平成一五年（二〇〇三）三月一日に福井県立歴史博物館が新装開館したが、そのメインは「昭和のくらしゾーン」にはかならない。「再現された駄菓子屋に入り込もうとすると、『カラー』と店のおばあちゃんの叱る声が流れる。電信柱の下には犬の糞が落ちていて、実際にネコに砂の上を歩かせて型を取った『ネコ』の足跡もある。板塀には鉄腕アトムの落書き、空にはUFOが浮かんでいる。どれも説明がない」といった状況で、さすが博物館施設だけに、汚い部分

もリアルに再現しているようである。ちなみに三〇年代に着眼したきっかけは、三年前の企画展「ちよっと昔のくらしぶり」であり、従来の企画展の三倍の一万五、〇〇〇人が入館する爆発的な人気となり、当初案になかった「昭和のくらし」が新装開館のテーマに急浮上した結果だという。「昭和三〇年代」は、現代日本を逆照射する意味で、また博物館活性化の一つの切り札として、各地で注目されている。平成三年（一九九一）の『AERA』の調査による「全国『昭和三〇年代』マップ」は以下の通りである。¹²⁾

(A) 博物館系

- (1) 東北歴史博物館（宮城県多賀城市）
- (2) 流山市立博物館（千葉県流山市）
- (3) 松戸市立博物館（千葉県松戸市）
- (4) 浦安市郷土博物館（千葉県浦安市）
- (5) 荒川区立荒川ふるさと文化館（東京都荒川区）
- (6) 昭和くらしの博物館（東京都大田区）
- (7) 集合住宅博物館（東京都八王子市）
- (8) 新潟県立歴史博物館（新潟県長岡市）

- (9) 福井県立歴史博物館（福井県福井市）
 - (10) 師勝町歴史民俗資料館（愛知県春日井郡師勝町）
 - (11) 滋賀県立琵琶湖博物館（滋賀県草津市）
 - (12) 大型児童館ビッグバン（大阪府堺市）
 - (13) 宝塚市手塚治虫記念館（兵庫県宝塚市）
- (B) テーマパーク系
- (1) 石原裕次郎記念館（北海道小樽市）
 - (2) 湯快爽快湯けむり横丁みはま（千葉県美浜区）
 - (3) 昭和の懐かし館（埼玉県行田市）
 - (4) ナムコ・ナンジャタウン（東京都豊島区）
 - (5) 台場一丁目商店街（東京都港区）
 - (6) 青函ワールド（東京都品川区）
 - (7) 新横浜ラーメン館（横浜市港北区）
 - (8) プリキのおもちゃ博物館（横浜市中区）
 - (9) 子どもの時代館（新潟県柏崎市）
 - (10) 美空ひばり館（京都府京都市）

(11) なにわくいしんぼう横丁（大阪市港区）

(12) みろくの里（広島県福山市）

(C) 町おこし系

(1) 高島町・昭和ミニ資料館（山形県東置賜郡高島町）

(2) 昭和レトロ商品博物館（東京都青梅市）

(3) レトロタウン上市（奈良県吉野郡吉野町）

(4) 昭和の町（大分県豊後高田市）

このように相当の数に上るが、何故博物館（および類似施設）ではこのように「昭和三〇年代」をテーマとして取り上げているかといえば、言うまでもなく先に触れたようにそれぞれが人々に受け容れられるからにはかならない。一頃までの民俗学は、「現代を捉えるには、先ず近代を相対化しなければならない」との前提で近代が研究対象とされ、それなりの成果もある⁽¹³⁾。しかし、そうした作業も不十分なまま現代を対象とするようになり、また、現代に連なる過去、即ち「昭和三〇年代」が俄かにクローズアップされ、その対処療法を余儀なくされている、というのが現状である。ともあれ、博物館における「昭和のくらし」展示については、「ノスタルジア」といった観点から寺尾久美子によって分析がなされている。ノスタルジアとは、『広辞苑』

によれば、故郷を懐かしみ恋しがること、また懐旧の念、郷愁にはかならない。⁽¹⁴⁾ それに対して寺尾はノスタルジアを「現在の捉え方との関係で設定される、特定の過去の一様式であり、基本的に、過去を肯定的に捉え美化する心情となってあらわれるもの」と定義している。その上で「昭和のくらし」の展示、即ち⁽¹⁵⁾（寺尾流に言えば）「近過去の展示」は、こうしたノスタルジアの媒体の可能性がある、と見ている。

昭和五〇年前後、筆者が奈良県立民俗博物館に勤務していた当時の観覧者の反応は、民具の展示に対して、つい最近まで使っていたことに懐かしみを覚える人がいる一方、「こんなもの家にもある」と、ほとんど関心を示さない人も少なくなかった。それからまた時が経過し、所謂民具も視野から消えかかり、変化した現状に照らして過去が想起されるに至ったのかもしれない。一定の年齢に達した人にとって、それは「見知りおきの過去」とはいえ、生活革命とさえ称されるほど変貌著しかっただけに、懐かしさも一入昂じて今日のようなブームの到来を見たと考えられる。

なお、「昭和のくらし」を展示に生かすにとどまらず、高齢者のケア、回想法に積極的に活用している博物館もある。それが先の『AERA』の一覧表、(A)-(10)愛知県・師勝町歴史民俗資料館である。近年社会福祉や医療の現場で回想法が重視され、民家や民具が回想法に役立つものとして注目されている。⁽¹⁶⁾ 回想法とは、高齢者が過去の経験について振り返って考え、それを

他の人に話したり評価したりするという、心理学的援助の一つの方法にはかならない。それに民俗学が寄与しようというのである。

師勝町歴史民俗資料館では、「昭和日常博物館の試み」と「高齢者ケアとしての回想法事業」という二つのプロジェクトを同時に進行させている。同館では、昭和三〇年代が日常生活レベルで今世紀、最も激しい変化が起こった時代と捉え、昭和時代の資料の大切さを伝えていくことが急務との認識から、平成五年（一九九三）より昭和時代をテーマとした展示を展開し、資料の収集・保存に当たり、平成九年（一九九七）にはフロア全体を昭和三〇年代の資料で構成し、「昭和日常博物館」という呼称を設定した。これらの展示資料に関しては、多くの来観者が見慣れており、彼等の記憶を呼び起こすと同時に、その記憶が二次資料（基礎的データ）として蓄積され、資料の価値をより高める結果になったという。そうして平成十一年（一九九九）には「ナツカシイってどんな気持ち」ナツカシをキーワードに心の中を探る。ヒーリング効果としてのナツカシサ」なる企画展を行ない、回想法と収蔵品の新たな関わりを提言したところ、特別老人ホームやデイサービスセンターなどからの見学者が相次ぎ、引率者は「高齢者が、普段とは異なった生き生きとした表情を見せている」と口をそろえたという。⁽¹⁷⁾その後、師勝町では「旧加藤家住宅」敷地内に「回想法センター」を建設し、資料館側では回想法スクールを開催したり、回想法キットの製作、貸出しなどの事業を積極的に展開している。

師勝町歴史民俗資料館のみならず、なじみの生活環境の再現、昔の民具を通じて痴ほうのケア、介護空間づくりにつとめる施設も増えているようである。例えば東京都・板橋ナーシングホーム（特別養護老人ホーム）では、平成一四年（二〇〇二）に食堂の一角を利用して、一九五〇年代前半の民家をほうふつさせる和室を再現した。設置に当たっては、入所者それぞれのライフヒストリーを聞き取り、共通要素を抽出して、古びた柱に障子、ちゃぶ台に茶だんす、縁の下にはぬか漬けのつば、床の間には掛け軸を吊るなど、可能な限り「なじみの生活環境づくり」に取り組んだ。同ホームの職員は、「こうした場所があるとお年寄りたちの心が和む。設置されてから、はいかいなどの問題行動の頻度が減った。効果は大きい」と評価している⁽¹⁸⁾。

回想法の効果は、それによって高齢者の表情が豊かになる、情趣が安定する、意欲が出るなどの効果があると言われており、民具や民家、ひいては民俗学がそれに貢献しうることは喜ばしい限りである。ただここで留意しておきたい点は、従来民俗学が対象として来た民具や民具への対応姿勢と若干のズレがあることである。新横浜ラーメン博物館の項で若干触れたように、昭和三〇年代の街は、イメージを再現することに主眼が置かれていた。また、板橋ナーシングホームのケースも、多くの入所者の聞き取りを総合して和室を再現したものであり、どこにもあるようで、実はどこにも存在しない情景を再現したものであった。また、師勝町歴史民俗資料館の、来観者の記憶による資料に関する基礎的データの蓄積といっても、一般的なデータ

一であって、それらの資料個々の過去を語る資料ではありえない。つまり、只見町や川井村の、実際そこで生活し、製作・使用した人達による資料に関する基礎的データと質的に異なるということである。この点については留意しておきたい。

三、「昭和の町づくり」と地域活性化

ここでは、「昭和」をテーマとした(C)町おこし系(4)大分県豊後高田市の「昭和の町づくり」に言及することにした。

豊後高田市は、国東半島の西北西の付け根に位置する旧城下町であり、人とモノの玄関口として戦前から隆盛を誇っていた。しかし、昭和四〇年(一九六五)に宇佐神宮との間を結んでいた鉄道が廃線となり、また車社会となって大型店が周辺に進出してくると玄関口としての機能を失った。市制を敷いた昭和二九年(一九五四)には人口三万人を超えていたが、今日では一万八、〇〇〇人台に落ち込んでいる(図1参照)。のみならず、少子化・高齢化も進み、平成一二年(二〇〇〇)には高齢化率二八・六パーセントに及んでいる。また、長らく国東半島随一の商業都市として栄えた中心市街地も、店舗数は激減し、空家・空地も目立つようになった(表2参照)。そうした状況への危機感から、商工会議所を中心に町おこしの取り組みが始まっ

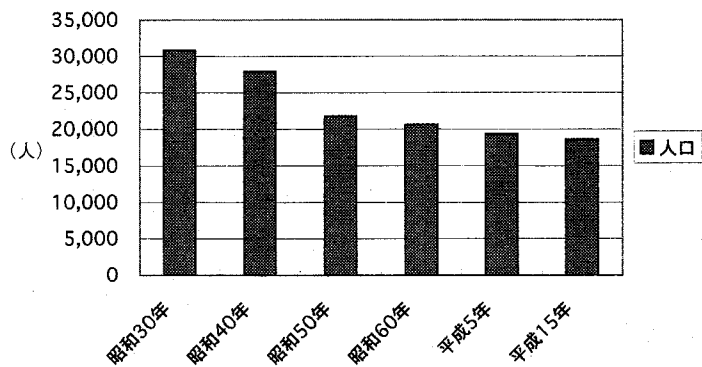


図 1 豊後高田市の人口の推移

表 2 豊後高田市の店舗と修景

修景店舗の年度別オープン数

平成13年度	10
平成14年度	9
平成15年度	10
平成16年度	7

平成16年度は予定。増える可能性あり。

街並実態調査(歴史調査)による創業時期

(店舗・料理店・遊技場・診療所・工場・事務所等)

昭和20年代	34
昭和10年代	18
昭和30年代	18
大正時代	18
昭和1～9年	13
明治時代	12
昭和50年代	11

調査対象数：160件

昭和35年度版豊後高田市住宅案内図との比較

	昭和35年	現在
店舗等	248	160
居宅・空地	38	151

たのは平成四年（一九九二）のことである。同年には「豊後高田商業活性化構想」が策定され、地域活性化へのスタートを切ったが、莫大な費用を要するハード面重視の計画だったため、この計画はお蔵入りとなり、「昭和の町」というテーマに辿り着くまでには紆余曲折があった。

改めて商工会議所、地元事業者、行政の三者で検討を重ねたが、今さら「城下町」では萩や津和野などの先例が多く、明治以降の銀行など近代化遺産もいくつか残るが横浜や小樽に勝てるものではない。そうした中でふと浮上したのが「昭和」というテーマであった。「鉄道廃止直前の活気に満ちた昭和三〇年代は、日本も、商店街も活気に満ちていた」「つい最近のことのようだが、すでに歴史の一部、しかも十分誇れる歴史なのではないか」と思い立つに至った。こうして平成一二年（二〇〇〇）には「街並み実態調査」を実施した⁽¹⁹⁾（表2参照）。さらにこの報告書を基に八つある中心商店街のうち、四商店街（宮町、新町二丁目、新町二丁目、駅通り）の一〇軒を皮切りとして修景事業を実施し、平成一六年（二〇〇四）末には二九軒に達する予定である（表2参照）。その結果「人の数より犬や猫の数の方が多い」と言われていた商店街も、連日観光バス一〇台も乗りつけるほど有名になり、年間二〇万人におよぶ観光客が九州を中心に全国から訪れるようになった。

なお、観光客に対して「昭和の町」のイメージを少しでもアピールするため、修景の際は単なる化粧直しではなく、商店の歴史である昔使っていた商売道具を店頭に飾る「一店一宝」を

実施している。例えば一号館・漢方の千草堂（安東薬局）、創業年代明治三五年、建築年代昭和初年、一店一宝「漢方薬の薬研と薬袋」「入れ薬の柳ごうり」、二号館・千嶋茶舗、創業年代大正一一年、建築年代大正時代、一店一宝「貨車借り切りの特大茶箱」、三号館・肉のかなおか、創業年代昭和二六年、建築年代昭和二六年、一店一宝「初代手回しの肉切り機」等々である。「一店一宝」といった発想は、元大分県知事の提唱した「一村一品運動」をもじったものなのだろうが、大分県下では豊後竹田を初めとして、雛人形を店頭に飾って顧客に公開するといった習俗（風俗？）もあり、そうした慣行とも関連するのかもしれない。さらには、大型店では購入できない店のオリジナル商品「一店一品」を販売しており、加えて売り手と買い手が気さくに声をかけ合う、古き良き時代の「あきんど」の姿に立ち戻ろうと努めており、それによってテーマ・パークとは異なった特色を出そうとしている。⁽²⁰⁾

一般にエコー・ミュージアムの場合、各地に散在するサテライトに対してコアを呼ばれる中央施設が存在する。豊後高田市の「昭和の町」の場合、それに相当するのが平成一二年（二〇〇二）一〇月にオープンした「昭和ロマン蔵（駄菓子屋の夢博物館）」である。もともとこの建物は、大分県きつての豪商野村家が、一万俵の小作米を集めて収納した農業倉庫であった。建築年代は昭和一〇年前後であり、昭和の遺産というべき土蔵造りのこの建物を再生したものである。中の展示を見ると、入り口にはちゃぶ台とテレビを据えた昭和三〇年代の住居の一室が



写真1 「昭和の町」の修景（豊後高田市）



写真2 駄菓子屋の夢博物館展示風景（豊後高田市）

再現されており、奥に入ると鉄腕アトム、キューピーといった人形やブリキ玩具、めんこ、ぬり絵、さらには映画のプロマイド・ポスター、漫画などがぎっしり展示されている（図2参照）。館長の小宮裕宣氏は福岡市の駄菓子屋の経営者で玩具などの収集家でもある。地元の人々の熱心な口説きに負けて、ここに移住して開館した。展示してあるのはコレクション二〇万点のうち約五万点ほどである。開館当初入館者数は月一人にも満たなかったが、今では少ない月で一萬五、〇〇〇人、多い月で三万人弱にのぼる人気のスポットとなっている。「町並みを歩き回り、人々との交流を楽しんではいたものの、正直な所『昭和三〇年代』というテーマ性を実感することができなかった。（中略）昭和ロマン蔵に入ってやっと『昭和三〇年代』の人々の暮らしぶりや活気を体験できたような気になった」という声も出るほどである。⁽²⁾

それはおそらく、「昭和の町」の修景がほぼ一〇年計画であって未だ整備途上にあること、また修景して間もないこともあって町の景観の落ち着きと味わいが充分醸し出されていないことなどに起因するものと考えられる。あるいは「一店一宝」になにやらつけ足しのような違和感を覚え、全体的な景観の復原を期待する向きがあるからなのかもしれない。加えてイメージとしての景観以上に、自分が直接使って生活したり遊んだりした多くの道具や玩具のほうが、ノスタルジアを喚起する力が備わっているのかもしれない。身近な道具の連鎖が次々と記憶を甦らせるという可能性もある。この点は今後の課題として残る。さらに重要なのは、多くの調査



機関が指摘するように、観光客が「昭和の町」を訪れるだけでなく、いかに地元の人々を誘引して活性化するかである。そのためには観光を中心に据えながらも、産業基盤、社会基盤を整備して若年層の流出を防ぐことも必要だろう。「昭和の町づくり」は可能性を秘めつつも、まだスタートしたばかりの事業であり、今後が正念場といえる。

結びにかえて

以上、「過疎化」「高齢化」「地域活性化」「博物館」「昭和三〇年代」をキーワードとして論を展開してきた。

福島県只見町、岩手県川井村の活動は、高齢の持つパワーをフルに活用して民具の収集・整理を行ない、さらにはそれらを活用することによって地域の民俗文化を見直し、継承するとともに、地域の将来を担う人材を育てようとする息の長い活動に他ならなかった。地域住民（とりわけ高齢者）の熱意と、それを方向づける適切なアドバイザー（民俗学の研究者）の存在、さらには行政のバックアップがそれを可能にした。しかし只見町の場合、民具の収集・整理までは完了したものの、それらを展示し活用する施設が整っていない。加えて、さまざまな活動の担い手である、川井村のような「高齢者人材バンク」が設けられていない点に課題が残る。

それと関連して民俗学の研究者についていえば、民具（民俗資料）を総合学習、あるいは生涯学習にいかに取り込んでいくのかといった問題意識が必要だろう。他方川井村についてみると、収蔵施設の空調等に不備があり、収集・整理した資料の保存体制の不充分さが目につく。また地域の活性化という意味では博物館単独の活動だけでは荷が重すぎるのであり、「木の博物館」構想全体の中に位置づけていくことが必要と考えられる。

一方、愛知県師勝町歴史民俗資料館における「昭和日常博物館の試み」と回想法への支援、あるいは豊後高田町の「昭和の町づくり」は、高齢者をターゲットとしてケアを試みたり観光地に誘引するというものであった。しかも、「昭和三〇年代」ブームを巧みに嗅ぎ取ってそれを活用する、という点では共通している。なお、前者のケースにおける回想法とその関連を考えると、民家や民具がノスタルジアを喚起し、高齢者ケアに役立つとはいえ、それは民具や民家の持つ属性が幸いしただけであって、民俗学や民俗学の研究者が貢献しているという訳ではない（師勝町歴史民俗資料館等の学芸員は別として）。民俗学あるいは研究者の社会的貢献に対する姿勢が問われるところである。いずれにしても、回想法によって意欲を取り戻した人の活動をどう誘導するのか、師勝町のそれについて言えば真のデータの資料化をいかに遂行していくのか、といった点についての検討が必要だろう。

最後に豊後高田市の「昭和の町づくり」であるが、コアとしての「昭和ロマン蔵（駄菓子屋

の夢博物館」とサテライトとしての各店舗とどう有機的に結びつけるか、これがエコー・ミュージアムといった発想に立つ上での課題といえる。また地域の活性化というレベルでは、観光をベースにどのように産業基盤、社会基盤を整備していくにかかっていると考えられる。

「付記」小稿の執筆に当たっては、福島県立博物館の佐々木長生氏、岩手県川井村教育委員会及び同村企画課、豊後高田市商工会議所より資料をご提供いただき、多大なご教示を賜った。また大分県立歴史博物館の菅野剛宏氏、院生の高木大祐、斉藤一生両氏らのご協力を得た。末尾ながら記して感謝申し上げます。尚最後に、小稿は二〇〇三、二〇〇四年度成城大学特別研究「地域再構築の比較文化史的研究」（代表者・小島孝夫）の成果であることを付記しておく。

注

- (1) 松崎憲三編『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院 二〇〇二年 二五三～二五五頁。
- (2) 岩井宏實編『博物館づくりと地域おこし』ぎょうせい 一九九一年 一～二頁。
- (3) 上山信一・稲葉郁子『ミュージアムが都市を再生する』日本経済新聞社 二〇〇三年 七七～七八頁。
- (4) 岩井宏實編 註(2) 前掲書 一頁。
- (5) 朝日新聞二〇〇四年九月二〇日付朝刊記事「六五才以上が十九・五％」による。

- (6) 関沢まゆみ『宮座と老人の民俗』吉川弘文館 二〇〇〇年 一〇二六頁。松崎憲三「ボックリ（コロリ）信仰の諸相（一）」『日本常民文化紀要』二三輯 成城大學大学院文学研究科 二〇〇二年 八一〜一七頁、他。
- (7) 福島民友新聞二〇〇三年一月二五日付「町民主役の只見方式に学ぶ」による。
- (8) 佐々木長生「只見町の民具と保存活用」『只見町の民具保存活用運動』只見町教育委員会 平成一三年 二四〜二五頁。
- (9) 佐々木長生 註（8）前掲論文 三三頁。
- (10) 川井村教育委員会提供資料と巢内亥十二氏ら地域の人々の聞き取りによる（二〇〇三年八月）。
- (11) 『AERA』平成三年四月一四日号 朝日新聞社 二〇〇三年四月 五二頁。
- (12) 『AERA』注（11）前掲書 五三〜五四頁。
- (13) 川村邦光『民俗の知への系譜〜近代日本の民俗文化〜』昭和堂 二〇〇二年 一〇一八頁。松崎憲三編『近代庶民生活の展開〜くへの政策と民俗〜』三一書房 一〇二八頁、他。
- (14) 新村出編『広辞苑』岩波書店 一九五五年 二〇一一頁。
- (15) 寺尾久美子「空間構成とノスタルジア〜博物館の『昭和のくらし』展示から〜」『日本民俗学』二三号 二〇〇四年 八九〜九一頁。
- (16) 岩崎竹彦編『福祉と文化のまちづくり〜回想法で輝く、人・時間・空間〜』備北新聞社 二〇〇三年 一〜二三頁。
- (17) 市橋芳則『昭和日常博物館の試み』の継続と『回想法・高齢者ケアの古く新しいツール』の展開について」季刊 ミュージアム・データ』六二号 丹青研究所 二〇〇三年 一〜七頁。
- (18) 岩崎竹彦「回想法と民俗学」『日本民俗学』二三八号 二〇〇四年 一二六〜一二七頁。

- (19) 二〇〇三年三月四日付日経流通新聞「昭和の街 取り残されてよみがえる」による。
- (20) 「観光地化はゴールじゃない」昭和の町（大分県豊後高田市）にみるユニークな商店街活性化」
『調査月報 EC』(株)いよぎん 地域経済研究センター 二〇〇四年 三三頁。
- (21) 「まちづくりは観光地づくりか」『city & life』七〇号 (財)第一住宅建設協会 二〇〇四年一〇、一
一頁。